

## 長谷川 千尋 准教授

京都大学大学院 人間・環境学研究院



## 【略歴】

1993年4月～ 京都大学文学部文学科  
 1997年4月～ 京都大学大学院文学研究科 修士課程  
 1999年4月～ 京都大学大学院文学研究科 博士課程  
 2006年4月～ 北海道大学大学院文学研究科 准教授  
 2014年4月～ 京都大学大学院人間・環境学研究院 准教授

▶長谷川先生が選ぶ、桜の季節にふさわしい和歌

藤原雅経

たづねきて花にくらせる木の間の月より  
待つとしもなき山のほの月

## 大学生活について

——どうして京大文学部に入学したのですか。

中学生の頃から日本の古典文学に対して漠然とした憧れを抱いていました。それで、古典を学ぶのであれば京都に身を置きたいと考えたのです。京大の「自由な学風」にも魅力を感じました。

——学生時代に何か打ち込んだことはありますか。

3回生で専門の勉強を始めるまでは、部活動に力を入れていました。所属していたのは、京都学派の哲学者である久松真一氏が創設した茶道部です。茶の稽古と並行して禅の修行もするという、非常に厳しい部でしたが、何かに打ち込みたいと思って大学に入ってきた私にはピッタリとはまりました。裏千家の今日庵でのお稽古や京都のお寺をお借りしての茶会、

高山寺の合宿など、かけがえのない経験をさせてもらったと思います。また、社会勉強をしようとアルバイトもしましたし、ユニセフクラブの活動や、障がい者の自立を支援するJCILという団体のお手伝いもさせていただきました。

——高校での学びと大学での学びの違いは何だと思いますか。

高校までの勉強は、正しいとされていることを教えられ、それを覚えたり、身につけたりしていくことだったわけですが、大学に入ると、途端にそれらを批判することが求められるようになります。大学では、それまで前提としてきたものをうのみにせずに、すべて疑ってかかなければならなくなるのです。最初は戸惑うかもしれませんが、とても創造的でやりがいのある営みです。

——なぜ研究者の道に進もうと考えるようになったのですか。

卒業論文を書いているうちに、もっと勉強したいという気持ちが募っていったからです。好きなことをしてご飯を食べていけたら、という思いもありました。両親には反対されましたが、困難な道であっても、この道を進もうと覚悟を決めました。

——なぜさまざまな研究領域から連歌の世界を選んだのですか。

連歌の独特な世界観は、茶道との共通点が多く、茶道部に所属していた私にはしっかりと受け入れられました。例えば茶道では、一度備前の花入を使ったらもう他の道具には備前のものを使わない、というように、使用する道具の重複を避けるのですが、連歌にも、同じような発想や言葉を繰り返して使わないという約束事があるのです。また、連歌は一句一句に着目すると、和歌の半分の長さしかない、言葉を最小限に切り詰めた世界です。まるで四畳半以下の小間の茶室のように、不要なものをそぎ落としていった末に、深い余情が漂う連歌に魅力を感じたのです。

——京都から北海道へと研究拠点を移して、何か感じたことはありますか。

専門が韻文ですから学生に花鳥風月の世界を伝えたいのですが、気候風土が本州とは異なる北海道の学生にはなかなかそういった話が通じないわけです。例えば北海道には梅雨がないので、五月雨を詠んだ和歌の趣を実感してもらうのは難しい、といった具合です。

——京都で学問ができることをどのように感じていますか。

和歌や連歌、物語といった日本古典文学は京都を中心に書かれていますし、何より京都には資料が充実しています。特

## 連歌研究について

に私の研究対象である連歌は、研究の蓄積がそれほど多くないため、元の写本を見に行く、ということが必要な分野ですし、今でも新出の資料に巡り合うことが期待できます。京都大学をはじめとして、京都の文庫・図書館、社寺などには多くの典籍が残されています。ですから、京都で日本古典文学を研究することができるのは幸せなことだと感じますね。

——研究に際して心がけていることはありますか。

何事も批判的な目で見るということを大切にしています。加えて、私の研究方法として作品を読むことに主眼を置いているのですが、そこで感じるのは、昔の人の感性が、現代人よりもはるかに豊かであったらということ。ですから、作品の解釈にあたっては、古注釈を積極的に利用するようにもしています。

——世間ではグローバル化が進行していますが、そんな中で、連歌という日本古典文学を研究することについてどのようにお考えですか。

日本に生まれ育った私たちが、過去の文化・文学に触れ、日本のことを知るといことは、突き詰めると自分自身のことを知ることでもあると考えています。まったく自覚はなくても、現代に生きる私たちのどこかに日本の古典的なものが染み込んでいるはず。日本古典文学を研究することを通して、そういったものに気付くことができるかもしれないと思っています。功利主義的な現代の世の中は、あまりにも短いスパンで物事の価値を判断しすぎていると感じます。そうした考えには背を向けて、実利にはまったく結びつかないことに耽る人がいてもよいのではないかと、とも思います。

——女性研究者特有の苦労はありますか。研究をしていく上で、男女の区別は感

じません。ただ、これも女性だから、ということではないのですが、現在私は子育てをしているので、子供を迎えに行ったり夕食を作ったりしなければならず、单身生活の頃と比べると圧倒的に時間が足りないと感じます。研究がしたいけれどできない、というフラストレーションが溜まっていますね。その分、研究のモチベーションは格段に上がりました。とにかく、この先、息の長い研究をしたいと思っています。

——京大生へメッセージをお願いします。

主体性を持って学んでほしいですね。学年が上がるにつれて、どの学問分野に進もうか迷うこともあると思います。しかし、そういう時に立ち止まってしまうのではなく、一步踏み出して何かを始め、試してみることが大事なのではないでしょうか。何事も自分である程度のところまでやってみないと、その真の姿はわからないものです。苛酷で熾烈な受験勉強を乗り越え、京大に入学したということだけで満足して燃え尽きてしまうのではなく、当たり前のことですが、京大で学び、卒業するからには、やはりそれなりの教養や知性、専門性といったものを身につけていってほしいと思います。

——ありがとうございました。

2017年度

## 担当される全学共通科目

(前期)  
 国語国文学Ⅰ  
 日本古典講読論Ⅰ  
 (後期)  
 国語国文学Ⅱ  
 日本古典講読論Ⅱ

